

# 『西欧の眼の下に』

## —裏切りと共同体—

金子 幸 男

『西欧の眼の下に』という作品は、普通「裏切りとその償い」をテーマとする作品であると言われている。主人公ラズーモフが狂信的革命家ハルディンを警察に売り、為に苦しみ、最後に告白して悲劇的結末を迎える这么简单に言えば、確かに、そのようなテーマが明確な輪郭を持って提示されていると考えても不思議はない。しかし、私の印象では、主人公の行為は本当に裏切りと言えるのかどうか、裏切りと言うのならどのような性質のものなのか、はっきりしないままである。裏切りではないともどちらとも言えない。考えられる最も簡単な理由は、作品中に、裏切りの方向を指示する要素と、裏切りではないという方向を指示する要素が混在しているのではないかということである。本稿ではこの点を扱ってみたいと思う。まず、第1～4節で、裏切りと言い切るのをためらわせるものは何かという点を見てみよう。

(1)

裏切りと言うとすぐに思い出すのが、『個人的な記録』の序文中の次の言葉である。「私の作品を読んだ者は私の信条を知っている。一中略一世界は、とりわけ、忠誠という考え方に支えられているということだ。」<sup>1)</sup> 忠誠という徳を重んじるコンラッドの態度は、イギリス商船隊の一員として船長にまでなった彼の経歴と無関係ではなからう。すると彼が忠誠と言えば、まず第一に船乗りの共同体に対する忠誠であろう。実際『ロード・ジム』という作品では、一等航海士のジムが、乗客もろとも船を見捨てて、船乗りの掟にそむき、船乗りの共同体を裏切ることになるのである。

海洋物と呼ばれる作品群では確かに確乎たる基盤を持った海の男達の共同体が存在しているが、作品の舞台が海を離れて陸へ移った場合はどうだろうか。

V. ウルフは「コンラッドの後期の作品(『ノストロモ』以後の作品)には、意図しなかったあいまいさ (involuntary obscurity)、不確かさ (an inconclusiveness) がある。」<sup>2)</sup> と鋭い指摘をしている。理由としてウルフがあげているのは、海の物語では、人間は自然と敵対しているのであり、その中で忠誠を試されるのであり、人間相互の関係は穏やかであるのに対し、陸の物語では、人間の価値を試す台風がない代わりに、さまざまな利害関係、人間関係、思想が入り乱れた世界が存在し、忠誠という徳はそのような背景と調和しないという事である。私流に言い換えるならば、陸の世界はあまりに複雑で、忠誠一裏切りといった場合、どんな共同体に対するものかはっきりしないということ、真に帰属すべき共同体がないということである。陸の物語である『西欧の眼の下に』でもおそらく同じことが言えるのではなかろうか。裏切りの曖昧性を論じるのに共同体という観点から眺めてみたいと思う。

## (2)

一般に地縁共同体あり、血縁共同体あり、思想によってまとまった共同体あり、宗教共同体あり、友人の集まりという共同体あり、最小のものでは家族という共同体がある。それではラズーモフについてはどうか。

ラズーモフの生きている社会は、政情不安と社会不安に揺れるロシア専制社会である。このロシアは、専制体制側と革命派との間の内部衝突にあえいでいる。だから、主人公が帰属感を持てる可能性のある共同体としてまず、専制国家側と革命派との二つが考えられる。ペテルスブルグ大学の学生である以上、そこでの友人の共同体が考えられるし、普通の人間であれば家族という共同体も考えられる。しかし、どういう理由か、物語の冒頭で読者に紹介されるラズーモフは、国家側にも革命側にもつかず、友人

も家族もない、いわば孤立した人間として描かれる。彼は「時折、ある教授の非公式な歓迎会に姿をあらわしたことを除けば、その町の中でどんな社会的関係ももたない人間として知られていた」<sup>3)</sup> (p. 13)。彼は日常生活を勤勉に送ることに終始している。彼も彼なりに時代の不安を感じつつはいるが、本能的に普通の実際的な日常生活にしがみついているのだ。彼の当面の目標は文部省から授与される銀メダルであり、その為懸賞論文に全力を傾けている。受賞すれば将来の社会的地位は約束されたも同然なのである。この点ではラズーモフは、将来は体制側を支える人間として、体制側の一員として身を立てようとしているとも言えよう。

ラズーモフが銀メダル、ひいては社会的地位の獲得にける熱意には激しいものがある。それは彼には家族という共同体がなく、生きていく為には自分の持つて生まれた知力を生かして社会的地位を得る以外にはないということからくる。

家族をもたないことに彼は一種のひげ目を感じ、家族に対する多少の憧れを抱いている。前年の銀メダル受賞者が受賞の知らせを聞いた時学生達の前で言った言葉を、ナレーターは挿入する。その受賞者は「まず、故郷の家族に電報を打たなくちゃ。そう！家の連中が二十マイル四方の隣人を集めてお祭り騒ぎをするだろうな」(p. 17)と言う。ラズーモフは「こういう事は自分にはこの世で絶対に起こらない。」(pp. 17-18)と思う。うらやましいという思いが感じとれるエピソードである。又、自分に学資を出してくれている保護者のK—公爵(実は実父)がかつて一度自分と会った時に握手をしてくれた時の感動もラズーモフには忘れがたい。自分が銀メダルを取れば新聞に自分の名が出るから、公爵もそれを見てくれるだろうと思うと、「そんな感動に胸高ぶらせている自分をかすかに笑」うのである (p. 19)。

家族のないことからくるこのような憧れには、家族共同体に心の安らぎを求めるラズーモフの姿勢が見てとれる。専制社会に将来の社会的地位を求めるということは、ラズーモフが、生存の保障と生の目標とを国家に求

めているということの意味する。コンラッドの世界では人間は共同体の中に生きて初めて意味をもつから、<sup>4)</sup>心の安らぎ・生存の保障・生の目標というのは、この作品世界における共同体の、人間にとっての機能であると言えよう。しかし、ラズーモフという個人に関わる上の三点は、ハルディンが彼の下宿に助けを求めてやってきたことによってはじめて大きく浮かび上がってきて、この作品のプロットの展開に大きな役割を果たす。帰属すべき共同体の選択を迫られたりもする。苦境に投げ込まれた主人公の心理の動きを追うことは、この作品の読ませ所の一つである。

(3)

この節ではラズーモフが革命家ハルディンを当局側に売るまでの心理過程を追ってみる。

下宿に潜んでいたハルディンから大臣暗殺の事を聞いた時、ラズーモフは銀メダルと共に社会的地位が消え去り目の前が真暗になったような気がする。この暗殺者を当局側に悟られることなく厄介払いしなければならないと考える。自分の生きていく道を閉ざされないように、以後知恵をふりしぼることを、ラズーモフの自己保存本能が働いているというふうに言うならば、この時点から彼はその本能を最大限に発揮させることになる。

想像力豊かな彼は、この暗殺者ハルディンとの関わり合いによって、将来を悲観的にしか思い描けなくなる。

<sup>(1)</sup>Razumov saw himself shut up in a fortress, worried, badgered, perhaps ill-used. <sup>(2)</sup>He saw himself deported by an administrative order, his life broken, ruined, and robbed of all hope. <sup>(3)</sup>He saw himself —at best— leading a miserable existence under police supervision, in some small, far-away provincial town,...

<sup>(4)</sup>He saw his youth pass away from him in misery and half-starvation—his strength give way, his mind become an abject thing.

<sup>(5)</sup> He saw himself creeping, broken down and shabby, about the streets  
—dying unattended in some filthy hole of a room, or on the sordid bed  
of a Governmental hospital. (emphasis added, p. 25)

下線部は皆“Razumov [He] saw himself”（厳密に言うとは(4)は“He saw his youth”）で始まる文で、その後に現在分詞又は過去分詞が読いて、同じシンタックスをとっている。執拗に同じ構文が繰り返されることによって、ラズーモフの緊迫した内面状態が伝わってくる。(1)から(5)へと悲観的想像が次から次へとあたかも大波が押しよせてくるかのように浮かんでくる。1～4行目では、“shut up”、“worried”、“badgered”、“ill-used”、“deported”、“broken”、“ruined”、“robbed”というふうに通分詞だけが使われている。暴力的意味合いの強い過去分詞が繰り返し用いられることにより、ラズーモフが無慈悲な専制国家の暴虐な力を前にしてはなすすべもなく無力であり、「受動的」立場に立たされる外ないということがわかる。ここでは生存に対する不安が、いろいろな悲観的将来を思い描くことによって強調されている。主人公の自己保存本能が活発に働いていると言い換えてもよい。

ラズーモフはまずハルディンを厄介払いしようとする。その為に彼の要請に従って、ズィーミアニチという、逃亡の手伝いを仕事の一つとするそり馬車屋と段取りをつけようとする。しかし、不運なことに、馬車屋は自分の女に逃げられた痛手を癒すために酒場で酒を浴びる程飲んで泥酔状態である。そりの手網を取ってハルディンを逃がすことは出来ないとわかる。これは明らかに偶然のなせる業である。本人の意志ではどうにもならない偶然という要素がこの裏切りに加担しているという事は、ラズーモフに行動の全責任を負わせるのを読者にためらわせる。

馬車屋が役に立たぬ為にほとんど困り果てたラズーモフは、雪の降りつもった通りをぼんやりと歩き続ける。その時、不思議な神秘体験をする。この体験を描いた部分は自然描写に乏しいこの小説の中で際立って美しい

場面である。

He cast his eyes upwards and stood amazed. The snow had ceased to fall, and now, as if by a miracle, he saw above his head the clear black sky of the northern winter, decorated with the sumptuous fires of the stars. It was a canopy fit for the resplendent purity of the snows.

Razumov received an almost physical impression of endless space and of countless millions.

He responded to it with the readiness of a Russian who is born to an inheritance of space and numbers. Under the sumptuous immensity of the sky, the snow covered the endless forests, the frozen rivers, the plains of an immense country, obliterating the landmarks, the accidents of the ground, levelling everything under its uniform whiteness. (p. 34)

ここでコンラッドが描くべき自然として選んだ対象は、雪、空、森林、川、平原といったごくありきたりな日常的対象であり、何らかの個別的具體性を持つ自然ではなく、一見すると何の変哲もなく美とも無縁のように思える。しかし、よく注意してみれば、それらの言葉は単独で用いられているのではなく、他の語と結びついているのである。3～4行目の「星々という華麗な炎」、4行目の「まばゆい純白の雪にふさわしく映える天空」、8～9行目の「贅を尽くした天空の壮大さ」、9行目の「限りなく続く森林」、9行目の「凍てついた河」、9～10行目の「果てしのない国土に広がる平原」と列挙すればこのようになる。名詞の“fires”、“canopy”、“purity”、“immensity”、形容詞の“resplendent”、“sumptuous”、“endless”、“immense”、という言葉は縁語となって、宗教的神聖性・永遠性を示唆する。ゴシック大聖堂の豪華な内部におり、祭壇には冷たい火が赤々と燃え、天井にははるか頭上に天空のようにそびえている、そのようなイメージが湧いてくる。これは9行目の“frozen”が暗示するように静止したイメージでもあり、

“immense”、“immensity”、“endless”、という言葉は、空間の無際限の広がり  
を表わすのみならず、ただちに転じて時間の無限性・永遠性を暗示する。  
ラズーモフはここでは自己が昂揚し自然との一体感を感じている。個人と  
いうものが取るに足りないものとなり、全体の中に包摂されていると言  
い換えてもよい。地上をおおう雪が「すべてを白一色に統一してならしてし  
まう」(11行目)からである。そしてこの全体とは、母なるロシア、ロシア  
という大地、自然なのであるが、それは宗教的神聖性を帯びている。ラ  
ズーモフはそのロシアを統べる神の如き一者を専制国家の皇帝と同一視す  
るのである。即ち、ロシア(母・自然・大地)—宗教性(神聖性)—専制国家  
という図式が成り立つ。だから宗教的であるという点でこの体験は「改宗  
(conversion)」(p. 35)であり、「恩寵(The grace)がラズーモフに下った。」  
(p. 36)とも言い表わされているのである。この「ロシア=専制国家」と  
いう論理によって、ロシアに必要なのは「民衆の相反するさまざまな熱  
望」ではなく、「剛毅なただひとつの意志」(p. 35)を持ち神性を帯びた  
「将来の偉大な専制君主」(p. 37)であるという結論が出てくる。その為  
にラズーモフは「自由主義への個人的願望」を捨て、自分とハルディンは  
「二粒の砂」にすぎないのであって、ハルディンは「切り取られねばなら  
ない枯れた部分」であると言い切るのである(p. 37)。この事は、専制国  
家という共同体を積極的に支持しているという事を意味する。

他方では、上の事は、一旦は我が身かわいさからハルディンを逃がそう  
としたことにより革命側を不本意ながら容認したのに、今度はそれとのつ  
なかりを積極的に否定したことになる。ラズーモフは、裏切りにはまず「倫  
理的絆」(p. 39)がなければならぬのにハルディンとの間にはそれはな  
いから、彼を売ることは彼を裏切るのではなく、むしろ国家に対する忠誠  
を示すことによって、「良心の行為」(p. 40)をなしたことになる。と考える。

神秘体験から専制体制支持を引き出し、ハルディンを当局に引き渡すの  
が良心の行為であるとするラズーモフの論理には、胡散臭いところがみら  
れるとナレーターは示唆する。やはり彼の行為は裏切りなのではないかと

匂わせるのである。ナレーターは次のような言葉を前出の長い引用部の前後に何げなく挿入する。まず、ロシアという大地は「受動的(passive)」(p. 35)、「生気がなく冷たく動けない(inanimate, cold, inert)」(p. 34)というふうに、消極性を含蓄する言葉で言い表わされている。ラズーモフはこの神秘体験ではロシアという大地との一体感に酔っているから、彼自身が「一種の神聖なる静止状態(a sort of sacred inertia)」(p. 35)にあることを示している。“inertia”という言葉には「遅鈍」という意味もあるから、ラズーモフが自分の誇りとしている知性を使っていないことになる。ロシア語で「理性の人」という意味を持つ言葉が「ラズーモフ」であるというから、<sup>5)</sup>彼は「理性」を放棄しているということになる。さらには、この体験には「嘘(falsehood)」があるとナレーターは語調を強めて言う。それは「生きるのに必要なもろもろのもの(the necessities of existence)」(p. 35)に根ざした嘘である。神秘体験の裏には、生きたいという欲求や野心を実現したいという欲望が働いているのにそれに気づいていないから嘘となるのである。

今一つ見ておかねばならないのは、本来ならば家族や友人という共同体を持っていさえすれば得られるはずの精神の安定がハルディン事件という危機に際して得られぬ為、他者との情緒的交流を求める欲求がラズーモフの行動に影響を与えているという点である。

泥酔状態のズーミアニチにハルディンを逃亡させるのは無理と判って事態の処理に手を拱いていた時、ラズーモフは今さらのように家族や友人のような心の重荷をとり除いてくれる人間がいたらと願う。他の連中には悩み事を持っていける片田舎の小さな家があるが、彼には「精神的隠れ家—秘密を打ち明ける隠れ家」(p. 34)もない。この孤独感はあまりに深いので、例の神秘体験を通じてハルディンを売る事を一旦は決めた後でさえも、その当人にすべてを話してしまおうという衝動に捉われる。熱っぽい告白がハルディンの心を動かし、抱擁しあい涙にむせび、「いまだかつて世に見ないような信じ難い魂と魂の結びつきが生じるであろう」(p. 40)とまで

ラズーモフは考えるのである。

彼は自分がこれからやろうとしている行為(密告)を「誰かに認めてもらうことの必要性を感じていた」(p. 39)。そこへまたもや例の偶然が介入してくる。「通りすがりの一瞬にラズーモフの視界をかすめた灰色の頬ひげがK一公爵の姿をまざまざと彼の臉に浮かびあがらせた」のである(pp. 40-41)。実の父である公爵とは一度会った事があり、その時に交わした握手に深く心を動かされていたことでもあり、このような危急の際に、公爵はラズーモフが話を持っていく相手として最適であったろう。それにしても通りすがりの男がK一公爵に似ていて、かつ公爵が体制側の人間であったという偶然がなかったら、ラズーモフの密告はこの作品で描かれているほどスムーズに運んだかどうかは疑わしい。

以上見てきたように、ラズーモフの密告という行為には、家族や友人を持たないが故に誰よりもコミュニケーションを求めるといった人間の根源的欲求が強く働いている。さらには、自己保存本能、社会的地位にかける意欲といったものもあった。このような個人的要因の上に、専制国家という共同体を選ぶか、革命集団側を選ぶかの問題が生じていた。結局ラズーモフは後者を拒けて前者を選んだのである。

しかし、専制国家というのも、主人公が真に帰属感を持てる共同体ではないことがすぐにわかる。ハルディン逮捕より数日後、大学から帰ってみると下宿が官憲の手で家探しされた後である。ラズーモフは自分が容疑者となったことを知り絶望感を覚える。

ラズーモフは、彼の眼が痛み出すまで、その紙片を凝視してすわっていた。乱れた紙片の山を片づけようとしなかった、その晩もあくる日も。あくる日には奇妙な不決断の状態のままに家ですごしてしまった。この不決断とは、ほかでもない、自分はこのまま生きながらえるべきかどうかという問題に関連していたのだ。(p. 71)

研究用に書きためた紙片が乱れているのにそのまま放っておくラズーモフの姿は、銀メダルめざしてこれまで頑張ってきた努力が空しく思われるようになったことを示唆する。茫然として凝視している様子には、自分の属している集団の為に密告をしたのに、その集団からは疑われることになった人間の絶望感がよく出ている。このまま生きながらえたとしても、革命側だけでなく専制国家側の無法にも翻弄されるだけだと慨嘆するのである。

(4)

(3)で追ってきた心理過程のどういう点が、裏切りというレッテルをはるのをためらわせるのだろうか。

主人公にとって専制国家が帰属すべき共同体でないとわかった今、狂信的革命家ハルディンに密告したことの正当性が崩れ、それが「良心の行為」であると以前のようにはっきりと言い切る事は難しくなる。その行為は、コンラッドの海の物語に現われてくるようなある一つの決まった共同体(船乗りの共同体)に対する裏切りではなく、帰属すべき共同体を持たない者の、果たして裏切りと言い切ってもよいものかどうかもわからぬ、曖昧さを孕んだ行為である。

前述したように、ラズーモフの行為には個人的動機が潜んでいた。即ち、自己保存本能がその一つである。しかし、これはそれほど非難されるべきことなのだろうか。ハルディンが大臣を暗殺した時には、「罪のない犠牲者」(p. 16)も出た。無辜の民を殺しても平気な革命家ハルディンに、ラズーモフの命を危険にさらせと要求する権利はなからう。<sup>6)</sup>

第一部で二人が会話をする場面では、コミュニケーションが全く成立していないことが読者に印象づけられる。ラズーモフに助力を求めに来たのは信頼故であり、かつ又、彼には「誰も身寄りがなく、どんな人間関係もないから、たとえこの事が何かのきっかけで露見しても誰も苦しまない」(p. 23)からだと皮肉なことにその革命家が言った時から、二人の間には越えられない深淵が出来る。ハルディンは全く誤解しているからだ。ラ

ズーモフの無口な所を信頼がおけると早合点し、その孤立した所がかえって彼の泣き所、ひげ目を感じている点であると理解できないハルディンは至極滑稽な存在に映る。彼がその革命と理想主義とを熱をこめてラズーモフに語れば語るほど、一つ一つの言葉は空疎に響く。ラズーモフが紙の上に取りとめもなく線を描きながら、「あいつ(ハルディン)は他の人間の安全は考慮しても僕の安全の事は頭になかったらしい」(p. 54)と思う時、二人の間にいかなる絆もありえないと読者は印象づけられるのである。だからラズーモフが自己保存本能を働かせるのは当然の権利であると思えてくるのである。

又、もう一つの動機として、他者との心の交流を希求する念が強い為に密告したという点があった。これは彼が、お互いが猜疑心を抱かざるを得ない時代に友人という共同体を持っていない事と、家族という共同体がない事に起因している。しかし、この二つが欠けているのは本人には至し方のない事である。又、社会的地位を望む念が強いのも彼の生い立ちからして当然の事で、これは自己保存本能に大きく関わる問題でもある。これらの已むを得ぬ個人的動機の上に立って、さらに、専制国家という共同体も革命側も主人公が真の帰属感を持てる共同体でなかったというのも、不運であったとしか言いようがない。しかも偶然が二度重なったとあっては始末に終えない。このような本人の意志ではどうにもならない状況の中で、ラズーモフはハルディンを密告したわけであるから、これを裏切りと言い切るのはためらわれるのである。このためらいを、ウルフが言うところの「曖昧さ」、「不確かさ」の例であると言ってもよからう。

(5)

第1～4節で述べた事とは逆に、多くの批評家は、ラズーモフの行為は裏切りであると言う。二人の間には確かに絆があったのだと主張する。A. J. ゲラルドによれば、ラズーモフは「最も深い人間の絆(the deepest human bond)を破ったのだ。この含み(this implication)は私には疑いのない

ように思われる。もしそれが存在していなければ、小説の残りの部分は倫理的に無意味なものとなるであろう。』<sup>7)</sup> この絆は、H. M. ダレスキーの言葉では「同胞又は兄弟の絆(the bond of fellowship or brotherhood)」<sup>8)</sup>であり、トニー・タナーになるとそれは「余計なものだが消し難いもの、政治的なものではなく被造物の絆(uninvited but ineradicable, not political but creatural)」<sup>9)</sup>となる。彼らの言う絆の特徴は、共同体の存在を前提としなくてもよいということ、二人の人間がいさえすれば、人間であるという資格において成り立つ絆であるということである。その絆は、簡単に言えば、「人間は人を殺してはならぬ」という基本的掟の中に見出される。

批評家がラズーモフとハルディンとの間に絆ありとする論拠は、裏切りの後のラズーモフが、ハルディンの幻にとりつかれているという点と、精神的な混乱をきたしているという点である。

ハルディンの幻は、明確な輪郭を持って読者に提示されるものもあれば、単に言及されるだけで終わる時もある。例の神秘体験の後、ラズーモフは、通りの真ん中に横たわっているハルディンの幻を見る。彼はその幻を踏み越えて行く。裏切り行為を象徴的に表わした幻である。ハルディンを引き渡して数日後、当局からの呼び出しがかかる。その時、「ハルディンが、突如、彼の前に、驚くべきことに細部にいたるまで寸分たがわぬその完璧な姿で立ちはだかったのである。」彼は「憎悪と軽蔑をこめてその幻をにらみつけた」(p. 77)。ジュネーブに舞台が移ってもその幻影は彼を悩まし続けているようである。革命側のド・S夫人との初めての会見で、夫人は彼の後ろにいる何物かを凝視しているのではないかと彼は疑う。自分〔ラズーモフ〕の姿をした亡霊でも見ているのかと夫人に問うた後で、彼は「まえに一度幽霊を見たんですよ」(p. 189)と言う。夫人のひどく勿体ぶった凝視に幽霊を読み取ってしまう所にラズーモフの苦悩の深さがある。女革命家のソフィア・アントノヴナとの会話の際には、ハルディンの名前が出て来ると、彼は自分で一種の曇った防御被膜のようなものを作り出し、「それを通して見るとあの事件(密告)がぼんやりと人間の形をしたな

んの特徴もない影のように映る。よく見なれた形ではあるが、まったく表情がなく、ただ暗闇の中で慎重に待ちかまえているといった気配があるだけだった。」(p. 207)。ハルディンの姿形をぼかして、できるだけハルディンの幻に苦しめられまいとする精神の防御作用のようなものが感じられる。

精神的混乱について言えるいくつかの徴候には次のようなものがある。<sup>10)</sup> 革命家達との会話の際にスパイとしての慎重さと自制を失って不必要な事を洩らしてしまったり、突然暴力を振るいたくなる衝動に襲われたりするといった点である。手短かに言えば、ラズーモフはハルディンを密告することによって、かえってますます泥沼に引きずりこまれたということである。このような混乱の徴候は彼が諜報活動をしているジュネーブで増幅されている。そこは革命家達の巢窟である為、ラズーモフはいつ身元がばれはしないかいつも恐怖にかられ、ますます孤独感を深めていくからである。生存の保障や精神的安定は、密告しそれが契機となってスパイ活動に従事することによって、かえって奪われている。過負荷の状態に置かれた彼の精神は、「虚偽という窒息させる煙」(p. 225)の中にいるようだと、  
「あたかも囚人であるかのようだ」(p. 208)とも言い表わされている。

ハルディンの幻影と精神的混乱という二つの心理的徴候を理由にして、その革命家とラズーモフとの間に同胞の絆ありとする批評家の言は、この作品を「裏切りとその償い」の方向で積極的に解釈していったものと言えよう。それは、帰属すべき共同体がない世界における裏切りを説明する唯一の方法だとも言えよう。この路線でいくと、裏切りに関わる個人的動機(自己保存本能や他人との交流願望)や、外的状況(帰属すべき共同体がないこと)、又、偶然の介入など、密告を裏切りと呼ぶのをためらわせる要素、即ち、本人の責任に帰せられないか又は已むを得ないこととして認められる要素は、批評家の同情をあまり引き出せないらしい。特に、密告の個人的動機は、利己的であるとして厳しく彼らは見ている。<sup>11)</sup>

(6)

では結末はどのように解釈できるだろうか。ラズーモフのナターリアに対する告白と、革命家達の前でする告白及びその後の悲惨な結果とをここでは眺めてみよう。

ハルディンの妹ナターリアに対するラズーモフの告白の意味を考えてみよう。彼はこの告白の中ではっきりと「後悔」(p. 291)という言葉を使っているので、本人の意識としては密告を裏切りと捉えていることになる。しかし、それでは何に対する裏切りなのかとなると彼はそれを明言してくれない。「自分自身を裏切ったのだ」(p. 298)とも、「自分自身を破滅に委ねたのだ」(p. 282)とも言っているが、これはせいぜいのところ、ラズーモフという人間が、特に絆があるとも思えないハルディンを密告したことにすら良心の呵責を覚える善良な人間であること、及びその事に自分自身がその時まで気づいていなかったことを意味する。それ以上の事、即ちハルディンとラズーモフとの間に絆があったとしたらどういうものなのかまでは、この告白は伝えてはくれない。しかし、後悔していると言っている以上、批評家の言うような同胞の絆を仮定せざるを得なくなる。

この告白ではっきりしているのは彼が「やっと空気が吸える」(p. 298)ようになったということである。それまでは「怒りと憎悪」(p. 298)に捉われていたのを彼女によって解放されて「真実と平穏さ」(p. 296)を取り戻したのである。これは物語の冒頭から彼には拒絶されていた人間的交流がやっとのことでもたらされたことを意味する。

人間的交流という点でナターリア以外にもうひとり老女テクラを見ておこう。彼女は献心的な老女で、耳が聞こえなくなって電車にひかれたラズーモフの面倒を見ることになる。この事は何を意味するのだろうか。

テクラは一貫して献心的で母性にあふれた女性として描かれている。過去の経歴にその一端がうかがわれる。即ち、ある若い石版工が逮捕され拷問を受けて仲間を裏切り肉体的にも精神的にも参っていたのを、看護して

その死をみとってやったというエピソードである。「全く寄るべなき者達」。「どこにも行き場がなくこの世の中に期待するものも何もない人間」(p. 130)の保護者であると彼女は自負するのであり、このエピソードとよく似た過程をラズーモフはたどるのである。

このテクラは、彼が電車にひかれるとすぐに飛び出してきて彼を抱きかかえてやる。まわりに群がる者に、「私はこの人の親類なんです(I am his relation)」(p. 305)と叫ぶ。印象的な言葉である。その後、ロシアの片田舎で彼を看護しているテクラを読者は垣間見ることになる。これは彼とテクラとの間に一種の擬似家族共同体が出来たことを意味する。母と息子のよような関係が出来たと言ってもよからう。

ナターリアも含めて、テクラ、ラズーモフの三者に共同体が形成されたと言うこともできよう。その共同体は、性質から規定すれば、R. P. ウォレンが「ノストロモ論」で言うところの「理解と温情と親切による人間の共同体(the human community... in understanding and warmth and kindness)」<sup>12)</sup>であり、情緒的交流という点から家族的共同体と言ってもよいだろう。このような共同体は最初から主人公に欠けていたもので、それが誘因となって裏切りという行為をしたのであってみれば、それが最後に与えられたということは、一種の救いと取れるだろう。作者が、家族的共同体の欠如という裏切りの一つの誘因をあまり厳しくは裁断していないからこそ、救いという形で最後に主人公に与えられたのであろう。

次に移ろう。革命家達の前でラズーモフは自分がハルディンを買ったのであり、警察のスパイであると告白する。そして彼らの暴力を受けて耳が聞こえなくなり近づいてくる電車に気づかず轢かれてしまう。この告白の意味は一体何だろうか。内容の点から言えば、スパイの身分を明かしたことにより、専制国家との関係を断ったことになる。もともと体制側とは絆といえるようなものは存在していなかったもので、帰属すべき共同体ではないと公言したと言えるかもしれない。又、革命側に対しては、身分を明かしたと裏切りを告白したこととによって、心理的負債を支払ったこと

になるかもしれない。

しかし、もっと重要なのは、この告白が、ラズーモフがスパイの疑いをかけられることが全くなくなった時点でなされたということである。ペテルスブルクから驚くべき報せが届く。そり馬車屋のズィーミアニチがハルディンを裏切ったのであり、良心の呵責から首をつったというのである。この報せでラズーモフはもうびくびくすることなく革命家達の間におさまっているのだ。だが告白という自殺的行為をした。これは、ハルディンを裏切った時には、その力のなすがままになってしまった自己保存本能を克服したということの意味しないだろうか。ラズーモフにこのような行為をとらせたということは、作者の次のような見方が働いていたといえよう。即ち、たとえ殺人を何とも思わぬ狂信的な革命家に対してであっても、信頼して助力を求めてきた以上裏切ってはならぬとする作者の厳しい態度である。そういう意味での同胞の絆が存在するのである。この厳しい見方は、ラズーモフの神秘体験の裏には生存欲求という個人的利己的動機が働いているから嘘があると述べたナレーターの厳しい見方とも一致する。端的に言えば、この作品では主人公の個人的動機のうち自己保存本能はきびしく裁断されているということである。

これまで見てきたように、この作品には、ラズーモフの行為を裏切りであると読者に認識させる要素と、裏切りと言ってよいかどうかとためらわせる要素とが混在していた。このように分裂した最大の要因は、コンラッドが「忠誠—裏切り」というテーマを、陸の複雑な世界の上で追ってみようとしたことにある。主人公が密告した原因のうち、自己保存本能が最後の自殺的告白という形で厳しく裁断されているのも、この事と無関係ではない。つまり、船乗りの忠誠は、自分の命を盾にして船や乗客や積荷を守る事によって果たされるのであるから、おじけづくというのは決して許されない罪である。この見方がそのまま主人公と彼をとりまく状況にもあてはめられたのであろう。故に、裏切りというレッテルが張られることにな

る。しかし、主人公の置かれた外的状況は海の上とは違っている。海では船乗りの共同体のみだが、陸の上にはいくつかの共同体が存立しうるし、そのどれにも属さないこともありうる。どれにも属さなかった故にラズーモフの行為は裏切りなのかどうか曖昧となったのである。それと同時に彼が自分の命を第一に考えたのも決して悪い事ではないのではないかと思われるのである。又、主人公の孤独な身の上は作品を通じて同情を持って眺められている。ナターリアやテクラという善良な人物と彼とが結び合わされたのも作者のそのような目と無関係ではあるまい。自身故国を捨て知り合いのない異国の地で暮らすことになった作者が、自分と主人公とをある程度重ね合わせているのだろう。いずれにせよ、この作品に見られる「裏切り」の曖昧性は、長年にわたる海上生活で作りに上げた作者の倫理感が陸の世界では単純には通じないという作者の苦い認識が、意識的にせよ無意識的にせよ反映したものであろう。

## 註

- 1) A Familiar Preface to *A Personal Record*, in *The Mirror of the Sea and A Personal Record*, by J. Conrad (London: J. M. Dent and Sons, 1960), p. xix.
- 2) Virginia Woolf, "Joseph Conrad," in Vol. I of *The Common Reader* (London: The Hogarth Press, 1984), pp. 228-9.
- 3) 以下この小説からの引用はすべてペンギン版により、頁数は本文中に記す。引用の訳は、篠田一士訳『西欧の眼の下に』（集英社、1981）を基に、引用者の自由な変更を施したものである。
- 4) 『ロード・ジム』の中で、“We must fight in the ranks or our lives don't count”（ペンギン版、p. 255）と言われている。これは集団の中でこそ人間は意味をもつものであると示唆しているのである。
- 5) Eloise Knapp Hay, *The Political Novels of Joseph Conrad* (Chicago & London: Univ. of Chicago Press, 1963), p. 292.
- 6) ジョスリン・ベインズは、普通の殺人者でさえ人の慈悲を請えば人道的見地からそれを与えられるのに、ハルディンのような高潔な理想主義者にそれを拒絶したラズーモフが良心の呵責に苦しむのは当然だと言っている。しかし、ハルディンはラズーモフとの会話の際、常にアイロニックな距離をとって描かれており、彼の理想主義はかえって滑稽に響いてくるように私には思われる。Jocelyn Baines, *Joseph Conrad*, (Harmondsworth: Penguin,

1986), pp. 438-9

- 7) Albert J. Guerard, *Conrad : The Novelist* (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1958), p. 243. 「この含み」という言葉には、ゲラールのはっきりと裏切りと言い切ることに對するためらいが感じとれる。
- 8) H. M. Daleski, *Joseph Conrad : The Way of Dispossession* (New York : Homes & Meier, 1977), p. 195.
- 9) Tony Tanner, "Nightmare and Complacency : Razumov and the Western Eye," *Critical Quarterly*, IV, No.3 (1962), 197-214 ; rpt. in *Conrad : Heart of Darkness, Nostromo and Under Western Eyes*; ed. C. B. Cox (London and Basingstoke : Macmillan, 1981), p. 175.
- 10) この点については、ゲラール (pp. 233-6) とタナー (pp. 176-184) がうまくまとめている。
- 11) ダレスキー (p. 195)、ゲラール (p. 233) を参照。
- 12) Robert Penn Warren, "On *Nostromo*," in *The Art of Joseph Conrad : A Critical Symposium*, ed. R. W. Stallman (Athens, Ohio : Ohio Univ Press, 1982), p. 212.